

このかそけき命

「あなたの命ある限り文鳥を守ってね」との亡妻の遺言を守っているわが友のことを、この欄で書いた。やさしい反響が多かったので知らせたく彼に電話したら、声は低かった。「文鳥は死んだよ。十二月一日の昼、ぼくの手のひらの中で眠るようにね……妻が四年半、ぼくがそれから五年、文鳥の十歳は人間の百歳だそうだ。家に動くものがない……寂しいもんだよ……」

しばし私は絶句。「いまは天国で奥さんと一緒だろうね……寂しさの真っ只中に座り込むつもりでいろよ……」。精いっぱい励ました。悲しみはひたりきること、なれていくもの。

信濃路はまだほの暖かい日だった。小林一茶の小さい累代墓は他の墓たちにまじって落葉で埋まっている。私たち旅人三人は裸の木立もれくるその傍らで語らっていた。その中のひとりの婦人の話。

——末の娘は障がい児だった。関係ありそうな病院はすべてかけ回ったが、だめだつ

た。近所の子と同じように学校に行きたいと言うようになってからの毎日はたまらなかつた。同じような子らのいる施設に入れるのがよいと、はたから強くすすめられて、ついに手放した。でもその日、引き返して連れ戻しに行った。園長がここを信用しない、私は医者だと言う。あきらめて、家に帰りつかないうちに電報。死んだって……ああ！

母の悲しみは静かに思い出と共に流露りゅうろうしていく。兄妹をつれて電車に座ったら、隣り席の母子が遠くへ席を移していった。私の娘がきたないと思つて。しばらくすると向こうでギャツと叫び声。はしやぎすぎて窓の戸が落ちて指をはさんだらしい。小さい息子がそつと言つた。「お母さん、神さまは本当にいるんだね」と。

かそけき命を小さい兄までもが全身で守つていたのだ。胸さわぎしながらもあの日手放した母は、今もわが身を賣めている。しかし、小さき魂への償いに母は生き直す。福祉に生きよう。いま、埼玉の優れた特養・東松山ホームの園長。わが子の写真をいつも胸にして。

(一九九〇年十二月十九日)